

盛土(もりど)工事

明治以降、商工業の発展とともに、工場やビルが大量に地下水をくみ上げたことにより地盤沈下が深刻化し、高潮による被害がますます大きくなりました。このため戦後の新しいまちづくりでは、区域を浸水や高潮から守るため大阪港の修築工事から生じる大量の土砂を使って盛土工事が進められることになりました。1950（昭和25）年のジェーン台風では、盛土工事が完了していた地域が浸水をまめがれたため、盛土の防災的価値が認められるようになり、盛土工事が急速に進められました。盛土工事は築港地域から順次取り組みました。



盛土後の路面高に合わせた 下水道マンホールの築造



 **送砂ポンプによる盛土工事**
大阪港の内港化工事で掘った土砂を送砂ポンプで運び盛土をしました。



ジェーン台風では
盛土のおかげで
大きな被害を免れた
木戸岡 宏 さん（79）

1950(昭和25)年の港区は、築港地域では盛土工事が進んでいましたが、それ以外の区域では盛土工事が行われていませんでした。そんな状態で9月にジェーン台風で、高潮被害にあいました。その時は築港地域の盛土をしている場所には、水は来たけれど床下をサーッと流れたただですぐに引いていきましたね。でも、盛土をしていない土地はすっかり浸かってしまいました。水没した家は台風の後、家を持ち上げて、その下に土を入れて盛土をしていましたね。

高潮対策事業

戦後、地盤沈下を止めるために、工業用水が給水され、地下水のくみ上げが制限された結果、1965（昭和40）年ごろに地盤沈下はほぼ止まりました。また盛土に加えて、防潮堤や防潮扉が整備され、さらに大阪港から川をさかのぼる高潮をせき止めるために、河口近くに水門が作られました。

こういった取組の結果、港区では第2室戸台風以降、高潮被害が起きていません。

2011（平成23）年におきた東日本大震災では、津波により多くの人命が失われました。津波から身を守るために少しでも高い場所に避難できるよう、港区では耐震の基準を満たした3階以上の建物を「津波避難ビル」に指定しています。

